

親鸞教學

光 輪 鈔	金 子 大 栄 1
信 仰 と 自 律 (一) —入出二門の源泉—	安 田 理 深 7
微 笑 と 戯 笑 —悲喜の論理—	大 門 照 忍 20
三 宝 成 就 の 信 心	本 多 弘 之 33
海 の 論 理 —想像力と信仰—	安 富 信 哉 46
三 心 と 三 信 —竊推斯心の二方向—	井 上 恵 樹 58
法 然 に お け る 民 衆 と の 接 点	薄 井 候 65
宗 教 的 時 間	稻 葉 秀 賢 78
諸 行 と 念 仏	曾 我 量 深 93

29

大 谷 大 学 真 宗 学 会

慈光はるかにかふらしめ
ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまふ
大安慰を歸命せよ

(浄土和讃)

編集後記

真宗教学の至宝であり、また本誌にかけがえのない御恩を賜わった金子大栄先生がついに浄土に還歸された。十月二十日未明、先生は溘焉として逝かれた。

この悲報に、先生の御化尊をかたじけなくした誰もが、大きな衝撃を受けたに違いない。御高齡のことでもあり、あきらめてはみるものの、曾我先生に続いて金子先生を喪った悲しみは、やはりどうすることもできない。まさに真宗学は両輪を奪われてしまったとの感が深い。

今更申し上げるまでもなく、先生は、九十五年の長い世寿の間、始終一貫して、自信教人信の念仏道を歩まれた。そのあいだ数知れない人々に薫陶を及ぼされた。また曾我量深先生との七十年代にわたる感動的な交流については指摘するまでもないであろう。が、先生の御一生は、決して平坦なものではなかった。若い頃には病弱で、いつも死を覚悟されたとのことであり、また大谷大学の教壇に立たれてからは、あの歴史的な異安心事件の渦中に身を投じて、しばらく宗門からは追われる羽目になった。「かえりみれば苦難の多い一生であった。どうして越えて

きたか解らない幾山河である。自分には自分のものでない力が働いているようである」『聞思室日記』続々」と先生は回想しておられる。

先生には、清沢満之師から伝灯された信念が、胸の奥に輝いていた。この信念によって、先生は逞しく生きえたのである。だが先生の風貌は、剛毅卓犖な内面に秘めた意志を、微塵もあらわにしていなかった。その柔和な印象は、どこか念仏者の体温を感じさせるものがあつた。

最晩年の、一面しか存じ上げぬ編集子、先生の学問や人柄について語る資格はない。ただ先生の警咳に接し、法縁を結ばせていただいたことを、しみじみと有難く思わずにはいられない。

とりわけ先生は、本誌に深い願いをかけておられた。御承知のように、本誌は昭和三十七年に誕生したのであるが、発行以来、先生は毎号自ら筆を執られた。この七月に私共がお宅を訪問したとき、これが最後だ、もう身体がいうことをきかぬ、と仰せられて、原稿を手渡された。老体に鞭打って、自からの手で墨書せられた論文、それが本号の巻頭に載せられた一文である。文字通り金子先生の絶筆であり、「白鳥の歌」である。(安富)

昭和51年12月1日 印刷
昭和51年12月10日 発行

親鸞教学 第29号 号 550

京都市北区小山上総町22

大谷大学真宗学会

親鸞教学編集部

発行人 藤原幸章

大谷大学真宗学研究室 振替 京都 8225番

京都市中京区寺町通三条上ル

文栄堂書店

振替 京都 2948番

京都市下京区七条御所ノ内中町50

中村印刷株式会社

電話 (313) - 0468番

編集
発行

発売

印刷

親鸞
教 学

第二十九号

昭和五十一年十二月十日発行

大谷大学真宗学会